

風のラ・ポワール：試みの中の「高畠」プロジェクト

～コミュニティ福祉学部フィールド型学習の試み～

岡田 徹

コミュニティ福祉学部「高畠プロジェクト」がはじまった。

完成年度をむかえたコミュニティ福祉学部はこれまで、フィールド型学習重視のカリキュラムを展開してきた。そして今、高畠プロジェクトは「フィールド・スタディ」「社会福祉現場実習」とともに、フィールド型学習の重要な一翼を担いはじめている。

ここでは、はじまったばかりのプロジェクトについての基本的な考えと、今年度おこなわれた具体的なプログラムや今後の展望を述べてみたい。

1. これまでの取り組み経過

立教大学と高畠町との関わりは長く、深い。

高畠町は「まほろばの里」とよばれる、山形県の内陸部にある四周を山々に囲まれた人口1万5千人ほどの町である。米や果物をつくる農家が多く、とくに早くから有機農業に取り組んできていることでも名高い。

私たちコミュニティ福祉学部が関わるまえから、学生部が「農業体験 in 山形高畠町」キャンプをおこなってきたし、また法学部の栗原 彬さんが10

数年来、ゼミ合宿を中心に高畠との関わりを深めてきている。

私をはじめ高畠を訪れたのは本学着任以前の、ある夏の昼下がりであった。この町が立教大学と深く関わっていることを知ったのはむろん、その後のことである。その時の私の印象は、四周を里山にとり囲まれた「時が止まったような町」であった。以後みたび足を運んでいるが、その印象は今でもかわらない。私の高畠との邂逅は不思議なめぐり合せである。

ところで、高畠との提携の話が学部で持ち上がったのは、1998年6月高畠町の町長と、当時の教育委員長である星 寛治氏の大学表敬訪問を受けて以降のことである。しかし提携の具体的な摸索は新設学部の構築に忙殺され



て進展をみることはなかった。

その後1999年6月、栗原 彬さんから高畠「水俣展」の誘いを受けて、私は一年生ふたりと高畠に出かけた。提携の話しが少し動きはじめた。しかしこの段階ではまだ、私の個人的な訪問にとどめておいた。

最初の一步

学部が正式に高畠との関わりをもちはじめたのは、2001年2月5～6日、学部教員である高橋教授、坂田教授、森本助教授そして私が高畠を訪問し、学部として正式に提携の協議に入った時からである。

おりしも大学として学生部主催の「高畠農業体験」キャンプの終了宣言がだされた前後であった。その矢先に、本学部が新たな提携関係の摸索にのり出した訳であるから、大学側の責任者である野澤学生部長に会い、学部の構想を伝えた。本学部の構想を呈示すると、野澤学生部長は教育研究内容に深く関わった高畠プログラムの内容を聞き、学生部という一事務部門で事務職員ができる域をはるかに超えた関係の進展であるというコメントを受けた。

2001年2月の会合において本学部から今後の提携について、次のような構想を呈示した。

<大学側>

- 1) 学生の体験学習の場として
 - ①基礎ゼミ
 - ②フィールドスタディ

③専門演習

④調査実習など正課授業としての交流

2) 地域型の現場実習先として

3) 学部の教育・研究資源の提供

①共同調査研究

②研修や講演

③大学教育プログラムの高畠への提供

たとえば小中高の学校での福祉の授業や福祉関係者への研修などの講師派遣

<高畠側>

これに対して、高畠町側からもいくつかの提案や要望が出された。

これまでの学生部や法学部栗原ゼミだけではなく、コミュニティ福祉学部が学部をあげて関わっていただけることを歓迎したい。今後、町としてはコミュニティ福祉学部と連携を強め、可能なことからはじめて協力関係を創っていきたい、と。また具体的には以下のような協力要請を受けた。

1) 各種の調査研究への協力

①福祉の町づくりに関する調査

②福祉保健事業の評価

③介護や保健に関する町民の個人カルテの作成

2) 研修や講演の講師派遣

3) 高畠高校福祉科（2004年開校）との提携

立教大学コミュニティ福祉学部に生徒を送り、町の福祉の後継者養成にあてたい。

2. 今年度のプログラム

初年度、私たちが心がけたことは「できることから始める」ということであった。まずは、たとえば調査演習、基礎演習さらに専門演習などの機会を通じて学生と一緒に高島を訪ねることによる的を絞った。学部教員に対して、どのような意向をもっているかをききとる簡単なアンケートをおこなった。4人の教員から以下のようなプログラムが提案され、今年度の活動としておこなわれることになった

- 1) 高島町「福祉の町づくり」に関する町民の意識調査（高橋絃士教授）
- 2) ゼミ合宿および「介護保険導入後の地域ケア・システム」に関する聞き取り調査（森本佳樹助教授）
- 3) 高島ロードレース参加（沼澤秀雄助教授）
- 4) ゼミ合宿および「高島町在住の外国人配偶者」に関する聞き取り調査（岡田 徹教授）

以下はその概要およびその経過報告である。

（*以下の報告はそれぞれの担当者による原稿を、私が修正しまとめた。）

1) 高島町における「地域と福祉に関する意識調査」の実施

高橋ゼミ（調査演習）では、2001年

度からはじまった高島町と本学部との連携プロジェクトの一環として、「高島町民の地域と福祉に関する意識調査」を実施した。昨年度後期から、調査対象者の標本抽出、郵送業務等に高島町の健康福祉課、保険課の担当者の全面的な協力をえて、調査票設計と集計分析を調査演習履修者の参加のもとで高橋研究室がおこなっている。

現在、調査票の集計分析をおこない、3月12日に予定している現地の報告会で調査結果を報告し、その後、4～5月には報告書を作成する予定である。

なお、2002年度プログラムとして、高島町から来年度介護保険事業計画の改訂にあたって、介護保険をめぐる町民の実態調査への協力依頼を非公式ながらうけている。

2) 介護保険導入後の地域ケア・システムに関するヒアリング

森本ゼミでは、介護保険導入後の、自治体単位でのケア・システムのあり方について関係者からヒアリングをおこなった。聞き取り調査の対象として高島町と新座市を選んだ。高島町を選んだのは都市近郊の新座市とは異なる自治体であることに加え、このプロジェクトを通して本学部とは特別の提携関係が築かれつつあったことがあげられる。

聞き取り調査はいくつかの問題意識なり仮説にもとづいておこなわれた。たてられた仮説を1年間の授業範囲内ですべて明らかにすることは無理であ

るが、少しでも実態を垣間見ることができればよいのではないかと考え、聞き取り調査を実施した。

<調査の概要>

調査時期：

2001年8月5日～7日

2泊3日のゼミ合宿時に、2チームに分かれて、それぞれヒアリング調査を実施した。

調査者：参加学生数11名（ゼミ生全員）

ヒアリング調査の対象：

- ①高島町役場健康福祉課
- ②高島町役場国保介護課
- ③高島町社会福祉協議会
- ④高島町在宅介護支援センターなど10数箇所

まとめ：

これらのヒアリング結果を、11月下旬から整理し、今年1月に報告書を完成させた。

3) 高島プロジェクト「高島ロードレース」への参加

「高島ロードレース」は50年以上も続いている地域密着型のロードレースで、日本陸上競技連盟の公認コースとして陸上競技者にはよく知られている。今回は立教大学コミュニティ福祉学部における高島プロジェクトなかで、高島町のスポーツ政策を体験することを目的に沼澤秀雄助教授（陸上競技部ヘッドコーチ）および大学陸上競技部長距離チームのうちコミュニティ



福祉学部所属する4名の学生で「高島ロードレース」に参加した。

当日は気温28度という初秋にしては非常に暑い競技環境の中でレースが行われたため、記録は低調であったが、参加した学生4名は大会の運営、スポーツを通じての町おこしの実情などを実際にみる事ができた。さらに、山々に囲まれた初秋の田園風景に接しながらのレースは選手達に日頃の練習では得られないものを残してくれたように思う。

今回はロードレースに特別参加で出場するという企画であったが、来年に向けて次のような展開が考えられる。

- 1) 「高島ロードレース」にあわせて子ども達のランニング教室を開催する
- 2) 「高島ロードレース」におけるボランティア体験（コースのごみ拾い、給水サポート等）
- 3) 地元の陸上競技指導者に対するセミナー開催

これらの企画を実施することで高島がロードレースによって展開しようとしている町の活性化に協力できるのではないかと考えられる。加えて、陸上競技部の大会参加を継続し、年間の競

技力向上計画のなかに、この大会を位置付けることで、選手の活動が地域の陸上競技普及にもつながっていくことを実感することができる。このことは大学での課外活動とフィールドワークの統合であり、学部と地域の連携ということでは新しいスタイルの教育活動になるのではないかとと思われる。

4) 高島町「外国人配偶者」に関する聞き取り調査

岡田ゼミのおこなった聞き取り調査の概要は以下のようであった。

日程：7月20日～23日

プログラム：

- ①外国人配偶者からの聞き取り調査
・ 閻莉（エン・リ）さんの話
（高島町嘱託職員、外国人配偶者担当）
・ 酒井係長（高島町保健福祉課）の現況説明
- ②星 寛治さん（有機農業農家。高島町前教育委員長）のお話。
- ③農作業体験（畑の草取り）
- ④絵本作家・浜田広介記念館にお



いて、広介の童話の読み聞かせと詩の朗読。広介作詞の童謡唱歌。

これらの方々からお話しを伺って、いろいろ学ぶことが多かった。

山形県内に「外国人配偶者」が多く在住している町が他にもあるが、閻莉（エン・リ）さんのような立場の人を確保している自治体は本当に少ないようである。全身全霊を傾けて仕事をしておられる様子がよく伝わってきた。また酒井さんの話しのなかで、私たち高島の人は「(先輩たちが残してくれた)貯蓄の取り崩しばかりではなく、新たな積み立てをしなければならない」というお話しが心に残った。星さんたちの有機農業への先駆的取り組みの話は福祉を学ぶ私たちにとっても考えさせられることが多かった。高島に50数名の人たちが農業移住してきたことには驚かされた。

今後は、以下のような課題をもちつつ、さらにゼミ共同研究を進めていきたい。

- ①虹の会（外国人配偶者セルフ・ヘルプ・グループ）会員からの聞き取り
- ②外国人配偶者問題に対する行政の取り組み
- ③町民のボランティアな取り組み
- ④「有機農業の町」高島とともに「多文化共生の町」高島は可能か？

3. 今年度取り組みの総括と、来年度へむけての課題

3月12日に関正勝学部長をはじめ、今年度プログラムに関わった学部関係者高橋、沼澤、岡田が高島を訪問し、今年度の取り組みの総括と、来年度にむけての課題を話しあう予定である。こうした提携交流の場合の総括や課題提起は一方的にすべきではないが、現時点で今年度の取り組みを私なりに総括すれば、当初の予想をはるかに上まわる展開がなされたというのが率直な印象である。

いずれのプログラムも、学生を巻き込んでおこなっている点に特徴がある。その意味でもこのプロジェクトは臨床・実践系の教育研究を標榜している私たちの学部の理念に相応しいものである。ここでは学生の反応は紹介していないが、調査票の作成や集計分析、聞き取りやそのまとめ、また伝統ある「高島ロード」への学生の参加など、いずれも学生の主体的取り組みなしでは不可能なものばかりである。

こうして現場にたつことにより、学生たちは問題意識を触発喚起され、人との出会いや交わりを享受し、現場に立って自分に直面する経験、喜びを分かち合ったにちがいない。

さいごに、今回、高島町の関係者から、立教大学に対する熱い思いが寄せられたことを記しておきたい。高島は他の大学からも提携関係をもちたいという申し出をうけているが、まず「立



教大学」に話しをもちかけたいということで、返事を先延ばしにしているとのことである。理由は、高島を最初に見出してくれたのは立教大学であり、その恩義を感じているからである、という。

これは大学の関係者がこれまで高島との間に築いてきた信頼関係や努力の賜物である。もし、私たちの学部が一からはじめなければならぬとすれば、今の地点にたつには何年もかかるはずである。こうした好意にみちた関係のなかで本学部が新たな提携関係の摸索の緒につけたことに、私たちは喜びと感謝の念を禁じえない。

この一文をかきながら、私は高島特産のたわわに実ったラ・フランス（ラ・ポアール）の畑を吹き抜ける風を感じている。

おかだ とおる
(本学コミュニティ福祉学部教授)